

岡山市の退院支援 ～退院意欲の低い入院患者との協働～

○川上 真紀 土器 悦子 太田 順一郎

岡山市こころの健康センター

1 目的

岡山市こころの健康センター（以下、当センター）では H21 年度の開設当初より、以前より行われていた国の「精神障害者地域移行支援特別対策事業（以下、事業）」とは別に入院患者の退院支援に取り組んできた。事業には「受け入れ条件が整えば退院可能な入院患者」などの規定があり、元々、本人に退院の意欲があり、病院が退院可能と考える人が対象者であった。当センターでは入院患者全員に退院の可能性はあると考え支援を開始した。支援開始当初は外部者である我々が、まず、病棟に入ることが重要であると考え、病棟内でのグループ活動等の支援を中心とした活動を行った。H23 年度からは個別支援への取り組みを重視することとし、入院中の患者への面接を実施し、退院支援を行うこととした。今回は入院患者の面接から得られた、本人の退院に対する希望や病院スタッフの認識から今後の退院支援の課題について考察する。

2 方法

H23 年度から H26 年度までに市内 6 ヶ所にある福祉事務所が行う「長期入院・入所者状況調査（162 名）」及び保健所が行う「市長同意者への面接（77 名）」、総計 239 名に当センター職員が同行し、患者本人や病院スタッフに対して院内面接を行った。その後、当センターの所内会議で退院の可否について検討を行った。この本人、病院、当センターの退院の可能性に関する認識の違いについて考察する。併せて退院支援を行ったケースも報告する。

3 結果

初回の面接時の本人の「退院の意向」は、「退院したい」85 名、「退院したくない」30 名、「わからない」12 名、「その他」12 名、「不明」（意思確認できなかった）100 名であった。退院の可能性に関する病院スタッフの見方としては「退院可能」101 名、「退院の見込みなし」121 名、「不明」17 名であった。

一方、当センタースタッフの見方としては「退院可能」が 165 名、「見込みなし」59 名「不明」15 名であった。また本人が「退院したい」と表明した 85 名について病院は 36 名、当センターは 4 名について「退院の見込みなし」と考えていた。また本人が「退院したくない」と表明した者 30 名のうち、病院は 15 名、当センターは 25 名について「退院可能」と考えていた。

4 考察

今回の結果の中で本人が「退院したい」と希望した場合でも病院は 42%の患者に対して「退院の見込みなし」と考えている。また病院が「退院の見込みなし」と回答した 121 名中にも本人は「退院したい」と考えている者が 29%いた。このように退院について本人の希望と病院の判断に相違があった。国が事業開始当初考えていた退院意欲がある人でも病院の退院支援の対象となっていないことがわかった。しかし、我々は本人が退院について前向きになれば退院の可能性は十分あると考えている。前述の本人の「退院したい」という希望を大切にしながら退院に向けて具体的に支援する一方で「退院したくない」という患者には退院意欲を高めるための働きかけを本人の自己決定を大切にしながら進めていきたい。

岡山市の退院支援
～退院意欲の低い入院患者との協働～

第58回 日本病院・地域精神医学会総会
平成27年11月5日

岡山市こころの健康センター
精神保健福祉士 川上 真紀



はじめに

- 岡山市は保健所が中心となり平成18年度から岡山県と協力して地域移行支援事業を実施していた。
- 事業の対象者となる人は病院から支援依頼があった入院患者が中心で「受け入れ条件が整えば退院可能な入院患者」

具体的には・・・

- ◎「本人に退院の意思がある人」
- ◎「病院が退院可能と考える人」が支援対象となりがち。

↓

- 平成21年4月当センターの設置により、市独自の事業のすすめ方について見直し検討を行った。

見えてきた問題点

(以前)

- 本人に退院の意思がある人
- 病院が退院可能と考える人

↓

(見直し後)

- 退院する意欲を持ってない入院患者
- 環境要因などにより病院が難しいと考えている入院患者

当センターの取り組み(岡山市の退院支援)

病棟全体への働きかけ

- 病棟でのグループ活動への参加
- 病院スタッフ対象の退院支援研修会

個別の患者への働きかけ

- 生活保護受給者・市長同意者への面接

当センターの取り組み(岡山市の退院支援)

病棟全体への働きかけ

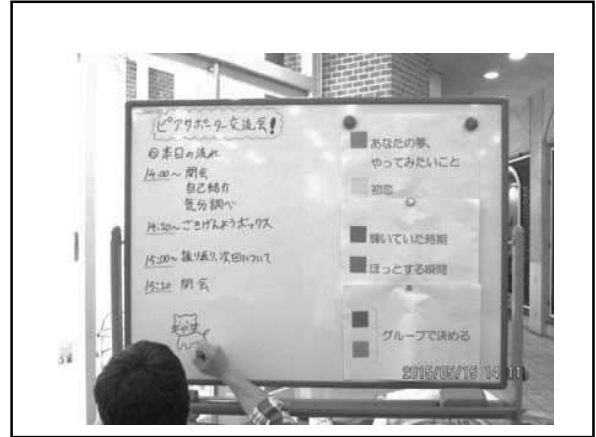
- 病棟でのグループ活動への参加
- 病院スタッフ対象の退院支援研修会

病棟内でのグループ活動への参加

(概要)

- 市内の精神科病院の病棟ごとに実施されているグループ活動への協力支援を行っている。
- 内容はピアサポーターと入院患者との交流が主で外への興味関心が失われるのを防ぐことと、本人の退院への不安などを解消していくことを目的とする。

ピアサポーター交流会



病院スタッフ対象の退院支援研修会

(概要)

- ・年1回、精神科病院や地域の事業所を対象に退院支援の研修会を行っている。
- ・内容は各病院の退院支援の現状報告や意見交換を行っている。
- ・会場は市内の病院を持ち回りで実施している。

院長挨拶



病院職員による報告



グループワーク



病棟全体への働きかけから得られる
病院スタッフや本人への効果

(病棟スタッフ)

- 研修会などで退院支援に関する病棟全体のアセスメント能力の向上。

(本人)

- 病院外の社会資源の情報などが得られることで退院に向けたイメージ化が持てる。

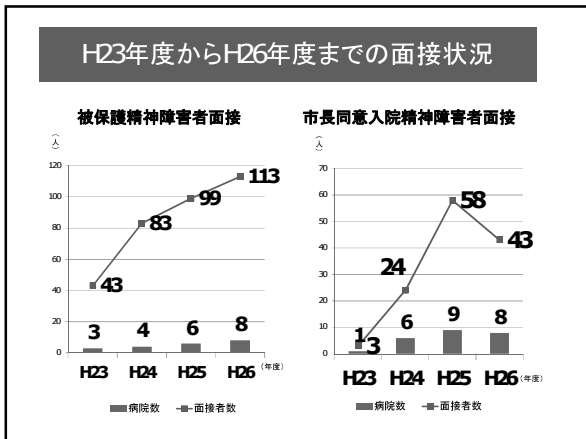
(共通)

- ピアサポーターを含めたグループ活動で、地域で暮らす患者さんのイメージ化が図れる。

当センターの取り組み(岡山市の退院支援)

個別の患者への働きかけ

- 生活保護受給者・市長同意者への面接



面接をとおして見えたこと
～退院に対する認識の違い～
(本人、病院スタッフ、こころの健康センター)

目的

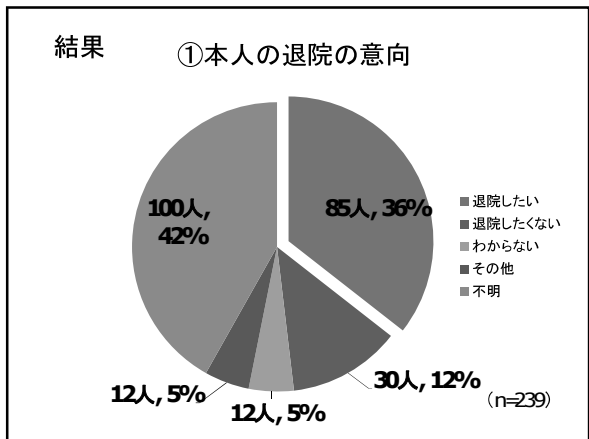
- 前述の面接から、本人、病院スタッフ、こころの健康センターの退院に対する認識が違うことがわかってきた。
- こころの健康センターではその差を埋めることで退院支援が進むのではないかと考え、その認識の違いを明らかにすることを目的に面接の結果を分析した。

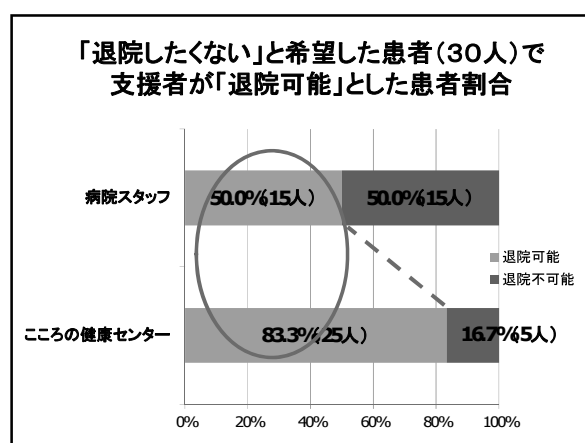
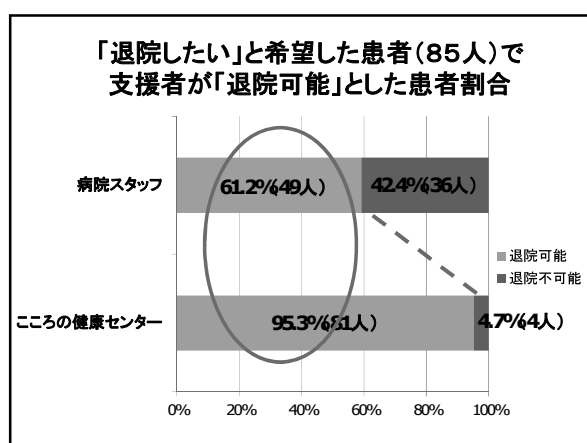
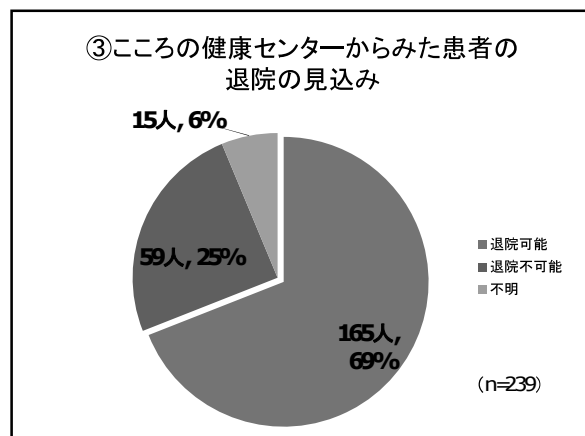
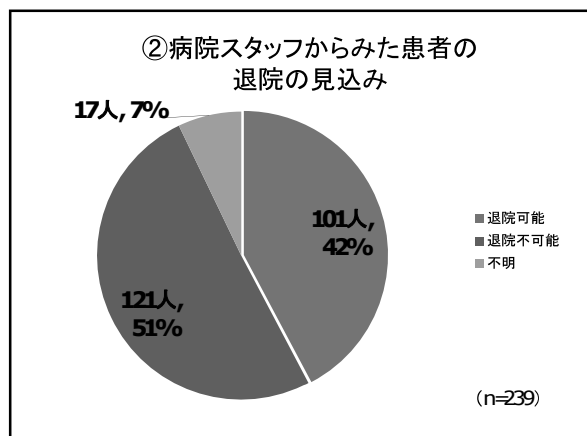
面接をとおして見えたこと
～退院に対する認識の違い～
(本人、病院スタッフ、こころの健康センター)

分析方法

- H23年度～H26年度までに面接した被保護精神障害者162人と市長同意者77人、総計239人に「退院の希望」についての面接を行い、その後、病院スタッフから患者に対する「退院の可能性」について聞き取りを行った。
- こころの健康センターで患者に面接した結果から「退院の可能性」についてアセスメントを行った。

この3者の認識の違いを比較する。





退院に対する認識の違い(結果)

- ・本人が「退院したい」と希望した85人のうち病院スタッフの評価は「退院不可能」が4割以上いた。
- ・本人が「退院したくない」と希望した30人のうち病院スタッフは半数の15人、こころの健康センターは25人を退院可能としていた。

↓

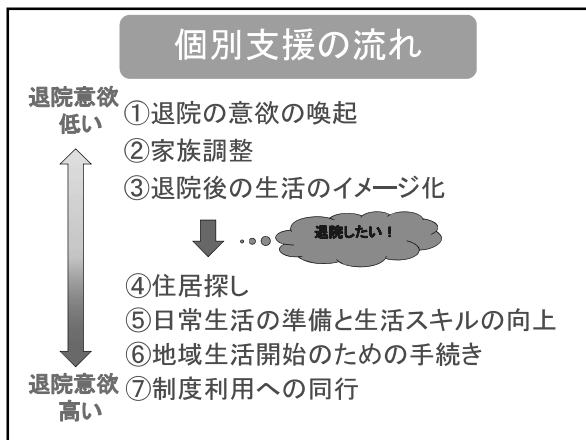
本人、病院スタッフ、こころの健康センター3者で退院の可能性に対する認識の差があった。

本人の「退院したくない」の裏には・・・。

- ・今まで退院の事など考えたことが無いのでわからない。
- ・退院の事を相談できる人が誰もいない。
- ・帰る場所が無い。(実家が無くなっているなど)
- ・本当は退院したいけど、長年お世話になっているので今更病院スタッフに「退院したい」など言い出せない。

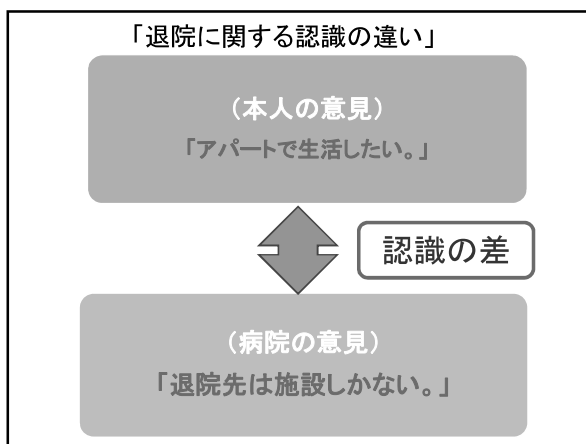
↓

本人が退院をあきらめている → 私たちはあきらめない支援を！！



(事例紹介:生活保護受給者への面接より)

- ・Aさん:男性 年齢:X歳 入院期間:3年11か月
- ・過去の入院回数:7回
- ・病名「統合失調症」
- ・病状は入院して7か月ぐらいから落ち着いており、ADLも良好。
- ・家族の関わりはなく協力は得られにくい。
- ・初回面接時(入院後:1年9か月)、「アパート退院したい」と希望をしていたが病院は過去の入院経過から「アパート退院は無理だ」と考えていた。

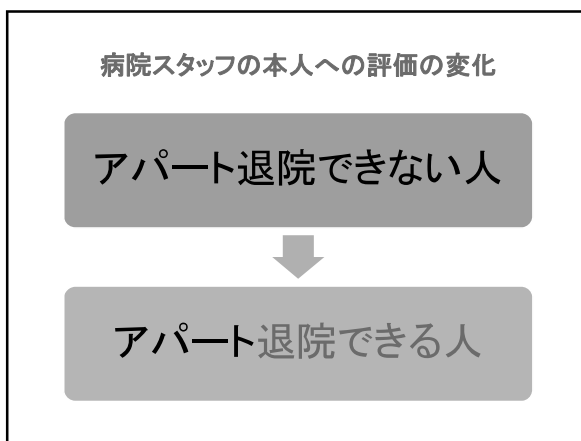


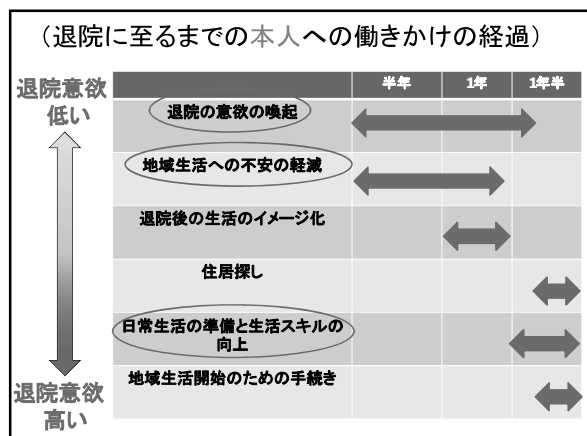
(退院に至るまでの病院への働きかけの経過)

	半年	1年	1年半
病院スタッフの話を伺う (スタッフ間のアセスメントの一致)	←————→		
本人が出来ていることを病院へ伝える	←————→		
住居探し・外出への同行			←→
病院スタッフと一緒に外での 本人の様子を見てもらう	←————→		
地域の支援事業所との連携			←→

(病院への働きかけ)

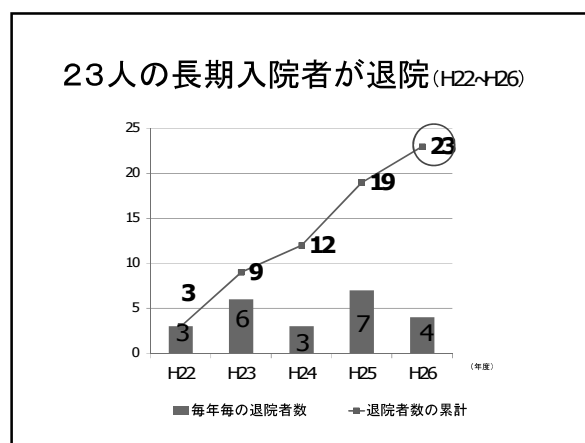
- ・病棟スタッフに話を聞いて、スタッフ間アセスメントの一致を図るためにケース会議などを定期的に行う。
- ・本人の希望が本当に無理なことなのか、アセスメントを再検討する。
- ・病院スタッフと一緒に外出し、病棟外での本人の様子を見てもらう。
- ・本人が「できること」を基に評価できるように情報提供を行う。(ストレングスモデルの活用)





- (本人への働きかけ)
- ・退院意欲が低下しないよう、定期的な面接や外出支援を続ける。
 - ・地域生活へ不安の軽減のために、実際の生活環境に慣れるための体験外出を繰り返す。
 - ・病院スタッフが安心し、本人も気に入るアパート探しを一緒に行う。
 - ・退院の際の福祉サービスの手続きなどを一緒に行う。

- 個別の患者への働きかけから得られる病院スタッフや本人への効果
- (病院スタッフ)
- ・ストレングスモデルを用いた本人の評価を行い、本人の希望を汲んだ支援方針を立てることにより本人と協力して退院支援ができるようになる。
- (本人)
- ・希望通り、退院できる。



- 考察
- ・認識の差を埋める支援が重要である。
 - ・本人だけでなく病院スタッフへも働きかけることが退院支援を進めるために効果的。
 - ・病棟スタッフは病棟全体のアセスメントを行い、退院支援の意識を持つ続けることと、本人の希望を汲んだ支援方針を立てることが重要。

